

笑い

寺田寅彦

青空文庫

子供の時分から病弱であつた私は、物心がついてから以来ほとんど医者にかかり通しかかつていたような漠然^{ばくぜん}とした記憶がある。幸いに命を取り止めて来た今日でもやはり断えず何かしら病氣をもっていない時はないように思われる。簡単なラテン語の名前のつくような病氣にはかかつていない時でも、なんとなしに自分のからだをやっかいな荷物に感じない日はまれである。ただ習慣のおかげでそれのはつきりした自覚を引きずり歩かないというだけである。それで自分は、ちょうど色盲の人に赤緑の色の觀念が欠けているように、健康なからだに普通な安易な心持ちを思料する事ができないのではないかと思う事もある。もつとも健康な人は、そういういい心持ちが常態であつてみれば、病後でもない限りやはりそれを安易とも幸福とも自覚しないだろう。すると結局日常生活の仕事の上には、自分のようなものも健全な人も、からだの自覚から受ける影響はたいしたものではないかもしれないが、しかしこれほど根本的な肉体的の差別がどこかに発露しないはずはない。

それで、これから告白しようとする私の奇妙な経験がどこまで正常な健康を保有している幸福な人たちに共通で、どこからが私のようなものに限つての病的な現象に連関して

いるかは、遺憾ながら私自身にもよくわからない。この一編を書くようになった動機はむしろこの点に対する私の不可解な疑念であると言ってもいい。

私は子供の時分から、医者 of 診察を受けている場合にきつと笑いたくなるという妙な癖がある。この癖は大きくなってもなかなか直らなくて、今でもその痕跡こんせきだけはまだ残っている。

病氣といつても四十度も熱があつたり、あるいはからだのどこかに堪え難い痛みがあつたりするような場合はさすがにそんな余裕はないが、病氣の自覚症状がそれほど強烈でなくて、起き上がってすわって診察してもらうくらいの時にこの不思議な現象が起こるのである。

まず医者が脈をおさえて時計を読んでいる時分から、そろそろこの笑いの前兆のような妙な心持ちがからだのどこから起こつて来る。それは決して普通のおかしいというような感じではない。自分のさし延べている手をそのままの位置に保とうという意識に随伴して一種の緊張した感じが起ると同時にこれに比例して、からだのどこかに妙なくすぐつたいようなたよりないような感覚が起こつて、それがだんだんからだじゅうを彷徨ほうこうし始

めるのである、言わばかうじて平衡を保っている不安定な機械メカニズムのどこかに少しのよいけいな重量でもかかると、そのために機械全体のつりあいがとれなくなつて、あつちこつちがぐらつて来るようなものかもしれない。実際からだが妙にぐらぐらしたり、それをおさえようとするとうと肝心の手のほうがぐりと動いたりするのである。

弱い神経ウィークナーヴと言つてしまえばそれまでの事かもしれないが、問題はこれが「笑い」の前奏として起こる点にある。

舌を出したり咽喉のどぼとけ仏を引つ込めて「あゝ」という気のきかない声を出したり、まぶたをひっくり返されたりするようなんでもない事が、ちやうど平衡を失つてゆるんでいるきわどいすきまへ出くわすためかどうか、よくはわからないが、場合によつてはこんな事でも、とにかくすでに「笑い」のほうに向かつて、倒れかかっている気分インパルに軽い衝撃スを与えるような効果はあるらしい。

いよいよ胸をくつろげて打診から聴診と進んで来るに従つて、からだじゆうを駆けめぐつていた力無いたよりなくすぐつたいような感じがいつそう強く鮮明になつて来る。そうして深呼吸をしようとして胸いっぱい空気を吸い込んだ時に最高頂に達して、それが息を吹き出すとともに一時に爆発する。するとそれがちゃんと立派な「笑い」になつて現

われるのである。

何もそこに笑うべき正当の対象のないのに笑うというのが不合理な事であり、医者に對して失礼はもちろんはなだ恥ずべき事だという事は子供の私にもよくわかつていた。そばにすわっている両親の手前も気の毒千万であつた。それでなるべく我慢しようと思つて、くちびるを強くかんだり、こつそりひざをつねったりするが、目から涙は出てもこの「理由なき笑い」はなかなかそれぐらいの事では止まらなかつた。そのような努力の結果はかえつて防ごうとする感じを強めるような効果があつた。ところが医者のほうは案外いつも平気でいっしょに笑つてくれたりする。そうすると、もう手離しで笑つてもいいという安心を感じると同時に、笑いたい感覚はすうと一時に消滅してしまうのである。

胸部の皮膚にさわられるのが直接にくすぐったい感覚を起こさせるので、それが原因かと思われない事もないが、実はそうではなくて、それよりはむしろ息を吸い込もうとする努力と密接な関係のある事が自分でよくわかる。腹部をもんだりする時には實際かえつてそう笑いたくならなかつた。

かかりつけの医者に診^みてもらふ場合には、それほど困らなかつたが、初めての医者などだと、もう見てもらう前からこれが苦になつていた。氣にすればするほどかえつて結果は

悪かった。そばに母でもいてこの癖をなるべく早く説明してもらうよりほかはなかった。それを説明してもらいさえすれば、もう決して笑わなくてもいい事になるのであった。

「男というものはそうむやみになんでもない事を笑うものではない」というような事を常に父から教えられ自分でもそう思っていた。いわんやなんら笑うべき正当の理由のないのに笑うという事は許すべからざる不倫な事としか思われなかった。それで、ある時だれか他家のおばさんが「それはどこかおなかに弱い所のあるせいでしょう」と言ってくれた時には、何かなしに一種のありがたい福音を聞くような気がした。なんだか自分の意志によって制すべくして制しきれない心の罪が、どうにもならない肉体の罪に帰せられたように思われた。

いわゆる笑うべき事がない時に笑い出すのは医者に診^みてもらう場合に限らなかつた。いちばん困るのは親類などへ行つて改^あまつた挨拶^{いさつ}をしなければならぬ時であつた。ことに先方に不幸でもあつた場合に、向こうで述べるべき悔やみの言葉を宅^{うち}から教わつて暗記して行つて、それをそのとおりに言おうとする時に、突然例の不思議な笑いが飛び出してくるのである。その時の苦しさは今でも忘れる事ができない。なかなかおかしいどころではなかつた。

しかしそういう場合に私に応接した多くのおばさんたちは、子供の私がわけもなく笑い出してもそんな事はてんで問題にもならないようであった。かえって向こうでもにこにこして「たいへん大きくなった」などという。そんな事を言われてみると、もう少しも笑わなくともいいようになる。そうして同時になんとも言えない情けない
ヒューミリエーション
自 卑 の念
に襲われるのが常であった。

こういう「笑い」の癖は中学時代になつてもなかなか直らなかった。そしてそれがしばしば自分を苦しめ恥ずかしめた。おごそかな神祭の席にすわっている時、まじめな音楽の演奏を聞いている時、長上の訓諭を聴^{ちようもん}聞^きする時など、すべて改まってまじめな心持ちになつてからだをちゃんと緊張しようとする時にきつとこれに襲われ悩まされたのである。床屋で顔に剃^{かみそり}刀^{はさみ}をあてられる時もこれと似た場合で、この場合には危険の感じが笑いを誘発した。

年を取るに従つて多少自分の内部の心理現象を内察する事を覚えてからはこの特殊な笑いの分析的の解説を求めようとした事は幾度あつたかわからない。しかしそれは自分などの力にはとても合わないむつかしい問題であつた。結局自分の神経の働き方にどこか異常な欠陥があるのであろうという、はなはだ不愉快な心細い結論に達するのが常であつた。

いつたい私にとつては笑うべき事と笑う事とはどうもうまく一致しなかった。たとえば村の名物になつてゐる痴呆ちほうの男が往來でいろいろのおかしい芸当や身ぶりをするのを見ていても、少しも笑いたくならなかった。むしろ不快な悲しいような心持ちがした。酒宴の席などでいろいろ滑稽こっけいな隠し芸などをやつて笑い興じているのを見ると、むしろ恐ろしいような物すごいような氣がするばかりで、とてもいっしょになつて笑う氣になれなかった。もつともこれは単にペシミストの傾向と言つてしまえば、別に問題にはならないかもしれないが。

そうかと思うと、たとえばはげしい颯風さつふうがあらでゐる最中に、雨戸を少しあけて、物恐ろしい空いっばいに樹幹の揺れ動き枝葉のちぎれ飛ぶ光景を見ている時、突然に笑いが込みあげて来る。そしてあらしの物音の中に流れ込む自分の笑聲をきわめて自然なもののように感ずるのであつた。

あるいは門前の川が汎濫はんらんして道路を浸している時に、ひざまでも没する水の中をわたり歩いてゐると、水の冷たさが腿ももから腹にしみ渡つて来る、そうしてからだじゆうがぞくぞくして来ると同時にまた例の笑いが突発する。

いずれの場合にも、普通いかなる意味においても決して笑うべき理由は見つからないが、

それにもかかわらず笑いの現象が現われ来るのをいかんともする事ができなかった。

もう一つの場合は、人から何か自分に不利益な誤解を受けて、それに対する弁明をしなければならぬ時に、その弁明が無効である事がだんだんにわかって来るとする、そういう困難な場合に不意に例の笑いが呼び出される。これは最もぐあいの悪い場合であるが、それを意志の力で食い止める事は、とても他人に想像されまいと思われるほど私には困難である。

この種の不合理な笑いはすべて自分だけに特有な病的の精神現象ではないかと思つてしたが、その後だんだんに氣をつけて見ると、必ずしも自分だけには限らない事がわかつて来た。子供の時分に不幸見舞いに行つて笑い出した事や、本膳ほんぜんをふるまわれて食つてゐる間にふき出したような話をする人も二人や三人はあつた。

ある時、火事で焼け出されて、神社の森の中に持ち出した家財を番している中年の婦人が、見舞いの人々と話しながら、腹の底からさもおかしそうに笑いこけているのを、相手のほうでは驚き怪しむような表情をして見つめているのを見かけた事もある。

戦争の惨劇が頂点に達した時に突然笑いに襲われるという異常な現象もどこかで読んだ。これらはむしろ狂に近い例かもしれないがしかしともかくもこんないろいろの事実を総

合して考えると、一般に「笑い」という現象の機能や本質について何かしらあるヒントを得るように思う。

笑いの現象を生理的に見ると、ある神経の刺激によつて腹部のある筋肉が痙攣^{けいれんてき}的に収縮して肺の中の空気が週期的に断続して呼び出されるという事である。息を呼出する作用にそれを食い止めようとする作用が交錯して起こるようである。ところがある心理学者の説を敷衍^{ふえん}して考えるとそういう作用が起こるので始めて「笑い」が成立する。笑うからおかしいのでおかしいから笑うのではないという事になる。

私が始めてこの説を見いだした時には、多年熱心に捜し回っていたものが突然手に入つたような気がしてうれしかった。

笑う前にその理由を考えてから笑うという事は不可能であるとしても、笑ってしまったあとで少なくともその行為の解明がつかないのは申し訳のない事であると思つていた。その困難な説明がどうやらできそうな心持ちがしだした。

それにはこの学者の説と、昔よそのおばさんが言つた「どこかおなかに弱い所があるせいでしよう」という事とを合わせて考えてみるといいようである。

以上にあげた特殊な「笑い」の実例を見ると、いずれも精神ならびに肉体に一種の緊張

を感じるべき場合である。もし充分氣力が強くて、いわゆる腹がしつかりしていて、その緊張状態を一様に保持し得られる場合にはなんでもない。しかしからだの病弱、氣力の薄弱なためにその緊張の持続に堪え得ない時には知らず知らず緊張がゆるもうとする。これを引き締めようとする努力が無意識の間に断続する。たとえばやと歩き始めた子ねこが、足を踏みしめて立とうとする時に全身がゆらゆら揺れ動くのもこれと似たところがある。

そういう断続的の緊張弛緩しかんの交代が、生理的に「笑い」の現象と密接な類似をもっている。従って笑いによく似た心持ちを誘発し、それがほんとうの笑いを引き出す。とこういうような事ではないだろうか。こう思つて自分の場合に当たってみるとある程度まではそれでうまく説明ができるように思われる。医者に診みてもらつて深呼吸をする時などには最も適切に当てはまるし、その他の場合でもあまりたいした無理なしに適用しそうである。

この仮説が確かめられる時は、自分の神経の弱さ、腹の弱さ、臆おくびよう病びょうの弱さの確かめられる時であるというのはきわまりなく不愉快な恥ずかしい事である。しかし同時にその弱さの素因がいくらか科学的につきとめられて従つてその療法の見当がつくとすれば、それはまたこの上もない心強い喜ばしい事である。

実際自分のようなものでも、健康のぐあいがよくて精力の満ちているような場合に、こ

のような変則な笑いの出現する事はまれであつて、病後あるいは精神過勞の後に最も顯著な事から考えてもこの仮説は少なくともよほど見込みがありそうである。

このような考えから出發して一般の笑いの現象を研究してみたらどうかという事は自然に起こる次の問題である。

狂人やヒステリー患者の病的な笑いはどうであらう。これは第一自分の経験もないし、また觀察すべき材料も手近にないからよくはわからないが、たとえば女のからだのある變化に随伴して起こりがちなヒステリーなどは、鬱^{うつ}積^{せき}した活力が充分に発現されないために起こる病的現象だとすると、前の仮説の領域から全く離れたものとは思われない。

しかしそれはしばらくおいて、もう少し正常な健全な笑いを考えてみる。
ノルマル

そういう笑いの中で最も純粹で原始的だと言われるのは、野蠻人でも文明人でも子供でもおとなでも共通に笑うような笑いでなければならない。野蠻人がいかなる事を笑うかという事が知りたいのであるがこれはちよつと参考すべき材料を持ち合わせない。やむを得ず子供の場合を考えてみた。子供の笑いの中で典型的だと思ふのは、第一に何かしら意外な、しかしそれほど恐ろしくはない重大ではない事がらが突發して、それに対する輕い驚^き

愕^{ようかく}が消え去ろうとする時に起こるものである。たとえば人形の首が脱け落ちたり風船玉のようなものが思いがけなく破裂したり、柵^{たな}のものが落ちて来たりした時のがその例である。第二にこれと密接に関連しているのは出来事に対する大きな予期が小さな実現によつて裏切られた時の笑いである。ビックリ箱をあけてもお化けが破損して出て出なかつたり、火花ができそなつてプスプスに終わったとかいうのがそれである。この二つは世態人情に関する予備知識なしに可能なものであつて、それだけ本能的原始的なものと考えられるが、この二つともにとにかくも精神ならびに肉体の一時的あるいは持続的の緊張が急に弛緩^{しかん}する際に起こるものと言つていい。そうして子細に考えてみると緊張に次ぐ弛緩の後にその余波のような次第に消え行く弛張^{しちよう}の交錯が伴なうように思われる。しかし弛緩がきわめて徐々に来る場合はどうもそうでないようである。

惰性をもつたものがその正常の位置から引き退けられて、離れた時に、これをその正常の位置に引きもどさんとする力が働けば振動の起こるというのは物質界にはきわめて普通な現象である。そして多くの場合においてその惰性は恒同であり、弾力は変^変位^トに正比例するから運動の方程式は簡単である。しかしこの類型を神経の作用にまでも持つて行こうとすると非常な困難がある。かりにあるものの変位がプラスであれば緊張、マ

イナスであれば弛緩の状態を表わすとしたところで、その「もの」がなんだかわからなければその質量に相当するものも、弾力に相当するものもわかりようはない。従ってこれが数学的の取り扱いを許されるまでにはあまりに大きな空隙くうげきがある。

それにもかかわらず笑いの現象を生理的また心理的に考える時にこの力学の類アナロジー型が非常に力強い暗示をもつて私の想像に訴えて来る。そうして生理と心理の間のかけ橋がまさにこの問題につながつていそうに思われてならない。

これを一つの working hypothesis として見た時には、そこからいろいろな蓋然がいぜんてき的な結果が演繹えんえきされる。たとえば笑いやすい人と笑にくい人などの区別が、力学の場合の「粘性」や「摩擦」に相当する生理的因子の存在を思わせる。粘液質などという言葉が何かの啓示のように耳にひびく。あるいは笑いの断続の「週期」と体質や気質との関係を考えさせられる。またかりに「笑い」が人類に特有な現象だとすれば、他の動物では質量弾力摩擦の配合が週期運動の条件を満足させないために振動が無週期的 aperiodic になるのではないかという疑いも起こる。

子供の笑いと子供にはわからないおとなの笑いとの間には連続的な段階がある。(A)

尊厳がそこなわれた時の笑い、(B) 人間の弱点があばかれた時の笑いなどは必ずしもこれを悪意な Schadenfreude とばかりは言われない。ここにもある緊張のゆるみが関係してくる。

(C) 望みが遂げられた時の喜びの笑い、これも無理なしにここの仮説の圏内にはいる。少しむつかしくなるのは、(D) 得意な時の傲慢笑い、(E) 軽侮した時の冷笑などである。しかし(D)には(A)と(C)の混合があり、(E)には(B)や(D)の錯雑がある。

(F) 苦笑というのがある。これは自分を第三者として見た時の(A)と(B)とが自分を自分とした時の苦痛と混合したものであろうか。

こんなふうにしてもつといういろいろな種類の笑いがLMN……というぐあいに導き出されそうに思われる。しかしこのような問題はもう純粹な心理の問題になって肉体との縁が遠くなる。これは自分のここに言おうとする事ではなかった。

この「仮説」はただ自分の奇妙な「笑い」に対する少年時代からの疑いを解くために考えたものである。この考えの普遍性を主張しようとしているわけでは決してない。しかし

それが少なくも多数の人に普遍なものを含んでいなければ私はやはり安心ができない。

物事を系統化する事の好きな人はその系統にはいらぬ事実には盲目になりがちなものである。私の現在の場合にもそんな傾向がないという事は断言できない。それでこれはまだ充分に考えてみなければどうなるかわからないが、しかしよく研究してみたらいくらか物になりそうな見込みはある。

読者の内にもし専門の学者があらばその人はこの私の素人^{しろうと}考えを正してくれるかもしれない。もしかた素人で同じ経験を持っている人があらば、その人は同じ問題の追求に加勢してくれるかもしれない。このような考えから、私はこの懺悔^{ざんげ}とも論文ともつかないものを書いてしまった。この全編の内容が一般の読者の「笑い」の対象になっても、それはやむを得ないのである。

(付記) この稿をだいたい書いてしまつて後に、ベルグソンの「笑い」という書物が手に入つて読んでみた。なるほどおもしろい本である。この書の著者は、笑いにはすべて対象があるものと考えていて、対象のない笑いには触れていない。そしてその対象は直接間接に人間的なものと考え、顔や挙動や境遇や性格やの滑稽^{こっけい}になるための条件公式あるいは規約のようなものをいくつも、科学的に言えばかなり大胆に持ち出してはそれを実例と

対照させ説明している。それを基礎として喜劇というものが悲劇ならびに一般芸術に対し
てもつ特異の点を論じたり、笑いの社会道徳的意義を目的論的な立場で論じたりしている。
読んでいるうちにいろいろな有益な暗示も受けるし、著者の説に対する一二の疑いも起こ
った。しかしこれを読んだために私がここに書いた事の一部を取り消したり変更する必要
は起こらなかった。私の問題は「対象なき笑い」から出発して、笑いの生理と心理の中間
に潜むかぎを捜そうとするのであるが、ベルグソンはすっかり生理を離れて純粋な心理だ
けの問題を考えているのである。

ベルグソンの与えている種々な笑いの場合で私のいわゆる「仮説」とどうしても矛盾す
るようなものはなくて、むしろこれに都合のいい場合がかなりにあった。そしてこの書の
終わりに近くなつて笑いと精神的の弛緩しかんとの関係に少しばかり触れている一節があるのを
見いだして多少の安心を感じる事ができた。

これらの読後の感想についてはしるしたい事がいろいろあるが、この稿とは融合しない
性質のものだから、それは別の機会に譲る事にした。

(大正十一年一月、思想)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

笑い

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>